

IV-77

SD法による地方都市のイメージ分析

秋田大学 正 員 清水浩志郎

秋田大学 正 員 木村 一裕

秋田大学 学生員 ○木村 宣幸

1. はじめに

近年、地方都市に在住する人々の中に、自分たちで住みよい都市を造ろうとする動きがみられるようになってきた。これは、彼らが豊かさに対し、積極的な意識を持ちはじめたことと同時に、地方都市の持つ独自の文化、伝統といった地域性が彼らによって再認識されてきたことによるものと考えられる。このように、住民の地方都市に対するイメージは徐々に変わりつつあるにもかかわらず、既存する地方都市の定義は、人口規模などの規模論、通勤・通学流動による圏域論や空間的位置論などの観点からの分析が多い。しかし、このような定量的分析だけでは、現在の地方都市を定義づけるものとしては不十分であり、地方都市に住む人々のイメージからの分析による地方都市の定義づけが必要となってきたと思われる。また、地方都市を規模論や圏域論などから分析するときも、これらイメージ論的分析を認識したうえでの再定義が必要となろう。

以上の認識に基づき本報告では、地方都市の‘すばらしさ’や‘良さ’といった要素を考慮することによって、地方都市に対する住民のイメージ構造を分析しようとするものである。

2. 調査の概要

イメージ構造を分析する手順として、まず、KJ法により分類し、さらにSD法の適用を提案する。本報告では、これらの認識に基づいて、秋田市を例に分析した。地方都市に対するイメージ調査は、男子大学生10名、女子銀行員10名の計20名を対象としたもので、地方都市から連想できる言葉をひとり5項目以上、自由にあげさせた。その結果、156項目を得、これらをKJ法によって各項目の統合性を見だし、構造化した結果、図1に示す「人間性」「都市観」「自然観」「都市施設」「交通」の5種類の言葉に代表されるグループに大別できた。

次に、これら5グループの位置づけがどのような

意味空間によって決定されているかを分析するために、オスグッドらによって考案されたSD法を適用した。それは、本報告のような個人の意識によって多種多様なイメージをもつ「地方都市」の構造分析には最適であると考えたからである。

コンセプトとして、KJ法によって大別されたグループを代表する言葉を用い、また尺度としては5グループの中からそれぞれ9項目、合計45項目を抽出した。さらに、それらの語を反対の意味を持つ言葉と対比させ、SD法のための調査票を作成した。

SD調査は秋田市に在住する19～22才の男女を対象に実施した。調査対象を若い人々に限定したのは、今後、地方都市の原動力となりうるのは若い世代であり、彼らが「地方都市」をどう捉えているかを分析することは、「地方都市」の再定義に極めて重要な意味をもつと考えたためである。なお、配布数は150票、回収数は135票、回収率は90.0%であった。

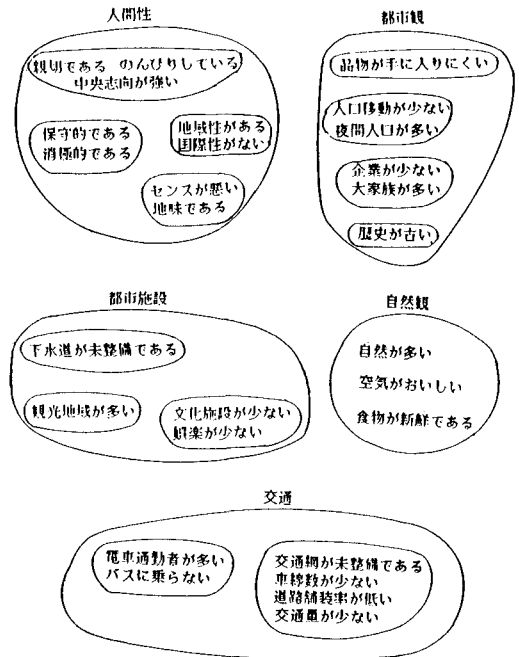


図1 KJ法による分類

3. 分析結果

調査結果の分析は初めに因子分析により行った。表1はバリマックス回転後の因子負荷量を示したものである。表より第Ⅰ因子は発展性を説明する因子であり、第Ⅱ因子は能力を、そして第Ⅲ因子は活動性を説明する因子に相当しているといえる。つまり、地方都市を説明するのに、この3因子が重要な意味を持っていることがわかった。

次に、上記の因子分析によって選定された発展性、能力および活動性の3因子上で、おのおのコンセプトがどのような意味空間に位置づけられているかを把握するために、各因子ごとに因子スコアを算定した。図2は各尺度の因子スコアをおのおのの評定値について示したものである。さらに、各コンセプトの距離関係に着目し、コンセプトを意味空間に位置づけることによって図3が得られた。図3より地方都市を説明する5つのコンセプトのうち、「自然観」および「交通」の情緒的イメージが他のコンセプトと比較して極端に異端である。これらの異端さは、図2に示されているように、「自然観」は発展性因子と能力因子によって、「交通」は能力因子と活動性因子によって特徴づけられている。つまり、「自然観」に関して住民は自然の豊かさや美しさなど、すばらしいイメージを持っていることと考えられる。しかし「交通」の場合には、その機能性が悪いこと、積極性に欠けることと評定していることから、交通網整備の立ちおくれやサービス水準の低下など、悪いイメージとして捉えているものと示唆できよう。

4. むすび

本報告では、住民が持っている情緒的な面を把握することは、地方都市を再定義するのに必要であるとの認識に基づき、SD法を適用し分析を試みた。その結果、これまで具体的に示されることがなかったイメージ構造が定量的、視覚的に明確になった。今後、地方都市に対するイメージ論の確定のために、規模の異なる都市に住んでいる人々のイメージ構造の相違など、さまざまな面から分析していきたいと考えている。

<参考文献>

岩下 豊彦 「SD法によるイメージの測定」

川島書店

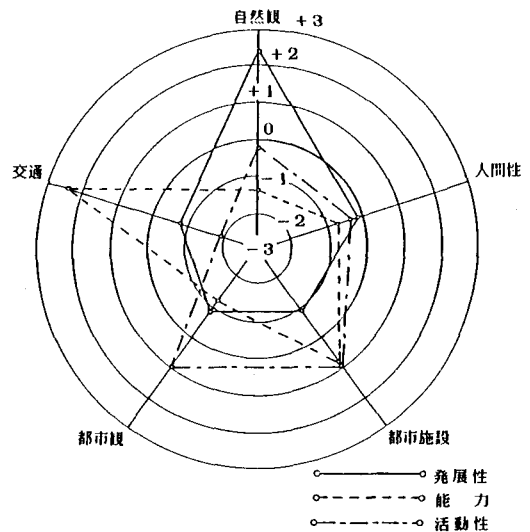


図2 コンセプト別因子スコア

表1 因子分析結果

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	h^2
量が少ない	0.68	-0.13	-0.03	0.48
水準が低い	0.67	-0.08	0.19	0.49
未整備な	0.55	-0.09	0.26	0.38
質がよい	0.35	-0.82	0.02	0.80
きれいな	0.37	-0.78	0.07	0.75
新鮮な	-0.06	-0.65	0.14	0.45
素朴な	0.10	-0.15	0.68	0.49
保守的な	0.11	-0.02	0.62	0.40
消極的な	0.17	-0.22	0.59	0.43
% of C	64.9	19.1	16.0	100

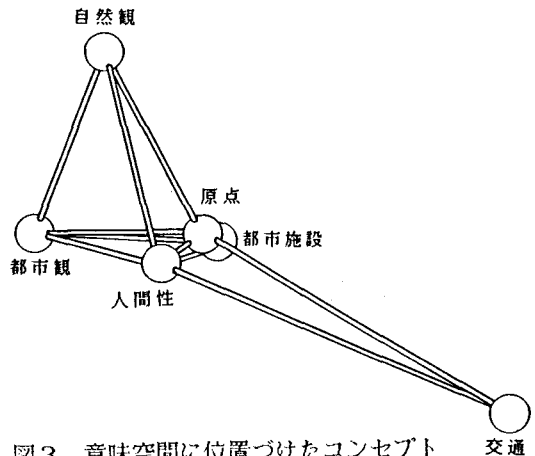


図3 意味空間に位置づけたコンセプト